

所 信

社団法人一宮青年会議所

2011年度理事長 村手 誠

はじめに

私たちの住むこの地域の治安が悪くなったと耳にすることが多くなってきました。確かに子供を一人で遊びに出すことですら躊躇してしまうような状況にあります。私たちが子供の頃から核家族化が進んでいると言われていました。私たちの親世代は子供を育てるのに地域のさまざまな人々の力が必要であり、地域社会のつきあいが大切であることを、核家族化する前の自身が子供の頃に育った暮らしの記憶により知っていました。そんな親世代に育てられた私たちは、自分自身が核家族で育った層が厚く、お祭りや年中行事まで日常生活の全般にわたって互いに協力しあって暮らしていた親世代とは違い、日々の暮らしの拠り所を消費社会のサービスに求めるようになり、何か問題が起こった場合も親世代は協力して解決しようとしていたのが、私たちの世代はサービスに不満を言うクレーマーが多くなっているように感じます。

そのような人との関わりを希薄にした快適さに身を委ねるうちに、子供への虐待や孤独死した高齢者が何日も発見されないといった暮らしの根本にかかわる事件が頻発しています。私が子供の頃は、親も近所のおじさん、おばさんも大人はみんな怖い存在でした。何か悪いことをした時にはちゃんと叱ってもらったことを覚えています。

今はみんながいい人になりたがっている時代ではないでしょうか。誰かを叱って恨まれたくない、人間関係を上手く保ちたい、言い返されたくない。誰にも文句を付けず、叱らず、ただ黙って見守る。そんないい人は、他人に無関心で、人に対する愛情の薄い人間であることの裏返しであるように思えます。人を殴れば殴った手も痛いように誰かを叱れば叱る側にも痛みはあります。そんな痛みを引き受けることの出来る大人が少なくなったことも、現状を招いた一因かもしれません。

いつの時代も変わらずに地域に根ざす青年会議所運動の根底にあるものは、地域を愛し、そこに住む人を愛することです。そのころは現代社会が忘れかけていることであり、最も必要なことであると思います。私たち2011年度一宮青年会議所は、こんな閉塞感が漂う混沌とした世の中であるからこそ、痛みを引き受けることの出来る大人として、自覚と使命感を持って、このころを原動力に、私たちの親世代が愛したこの地域を私たちも愛し、将来子供達にも愛してもらえるよう活動致します。

しなやかなところで地域の未来へ夢を描こう

私たちが子どもの頃は近所の子供達と大勢で鬼ごっこや缶蹴りをしたり、秘密基地を作ったり、自分達でいろんな遊びを考え、その遊びを通して物事の良し悪しや相手を思いやる気持ちを育んでいたように思います。

現在の子どもたちを取り巻く環境は、何でもすぐに手に入る為に、あまり努力をする必要がない時代であり、パソコンやゲーム機・携帯電話の普及により、便利になった一方、人と接し直接会話をする機会が少なくなり、人と人のコミュニケーションが以前より充分に取れなくなっている様に感じま

す。その結果、他人の事を思いやることのできない自己中心的な子どもが増え、人に対する思いやりが不足しているのが現状かと思えます。もしかすると、悪いことをしたときにちゃんと叱ってもらえるような、自分の親以外で親代わりとなって面倒をみってくれる社会的親が不在であるのかもしれませんが。

相手を思いやる気持ちは人と人とのこころの交流から生まれるものではないでしょうか。思いやりのこころは、人と人との繋がりが希薄になっている現代社会において今一番必要な事だと考えます。だからこそ、青年会議所メンバー自らが地域の親となり、地域社会が子どもたちの社会性を育む学校となるべく活動し、青年会議所に任せておけば大丈夫と言われるように、物事に背を向けずに謙虚な姿勢で取り組むべきであり、痛みを引き受けることができるやさしく強い「しなやかなこころ」を身につけなければなりません。

やさしい人が集う青年会議所が活動することで、地域に笑顔が溢れ、その笑顔を見た人が笑顔になるような、笑顔の連鎖、こころの連鎖を生み出したいと思えます。遠回りをすることによって気づくこともあるように、一步一步着実に事業を通じて子どもの目線、時には親の目線で、共に学び真摯に向き合い、心豊かな地域の未来へ夢を描けるように、決して慢心しない自らが相手を思いやるこころを推心していきます。

そのためには、気持ちだけでなく子どもたちに残す地域のあり方を検討し、地域デザインを創出して安心して楽しく暮らすことのできる地域社会を創造するために、将来この地域を担うことになる子どもたちのために地域の大人が汗をかきましょう！

明るく豊かな活力溢れる地域を目指して

長引く経済不況や政治不信は政権交代を引き起こし、日本という国はこれからどう進むのか、時代はまさに混沌とした状況にあります。それは我々メンバーの多くが属する企業においても決して例外ではありません。次から次へと私たちの前に突きつけられる厳しい出来事の中「青年会議所活動をしていて良いのだろうか」と何度も自問自答している人も多いのかと思えます。しかし、我々若い世代の志を同じくする仲間が一致団結し、英知と勇気と情熱を持って行動する事によって、地域に元気を取り戻す事が必ず出来るはずです。そのためには我々が愛するこの地域のために、未来を担う子どもたちのために、そして自分のために気概を持たなくてはなりません。

多くの人を感じている不安感の正体は先が見えないことに他ならないと思えます。しかし、振り返ってみると先が見えた時などなかったと思えます。その時その時を懸命に生きて将来を造りあげて来たはずです。将来を創造する行動をいま起こすことは、まさに将来を今活動することになるのです。いまこの時この瞬間が将来に繋がると信じ、ワクワクする未来のための覚悟を決断し、いまを変えましょう。

人間は誰も、誰かに喜ばれるために生まれて来て、確かにその喜ばれている実感が、人間を成長させます。経営も仕事も生きることもその一点に集中するのではないのでしょうか。理想とする人間のあり方を実現するために社会があり、経済も経営も存在し、どんな出来事も、必要必然であるから起こり、厳しい出来事こそ何かを教えようとやって来ます。だからこそ、常に謙虚な姿勢を保ち

感謝して何かを学ばなければなりません。そこで得た良心を守り判断基準として、至誠一貫、明るく豊かに生き、私たちを送り出していただいている企業へ還元することが、一宮青年会議所メンバーも地域に生きる市民であるからこそ、明るい豊かな地域の創造に繋がると確信します。

そして私たち青年会議所が、中心となってまちづくりをしていく存在であるためには、日々の修練や自己研鑽が必要不可欠です。貴重な機会である各種大会等へ積極的に参加して人間力の向上を図る機会を存分に活用し、未来を創るひとつづくりに取り組んでまいります。また、多くのメンバーが企業の経営に関わるひととして、個々の経営資質の向上を図り、この不況という艱難辛苦を乗り越えて、ひと、企業、地域がさらに活力を増すよう努めてまいります。

60周年を迎えて未来へ

2011年、社団法人一宮青年会議所は記念すべき創立60周年を迎えます。この60周年にふさわしい未来へつながる事業を行い、一宮青年会議所の存在意義を幅広く発信していきます。地域に根ざした組織である私たちは、更なる地域の発展に貢献をしていかななくてはなりません。そのために公益法人格取得の検証をしっかりと行き、2010年代運動指針の策定をし、今後の礎とした上で、私たちにとっての「明るい豊かな地域づくり」とは何であるのかをしっかりと打ち出させていただきます。

私たちの青年会議所活動は単年度制で行われますが、その「単年度制」を時には都合良く、時には都合を悪くして利用していないでしょうか。公益社団法人格の取得という目標がある中、「単年度制」に縛られることなく継続可能な事業を打ち出す必要があると考えます。そして、この事業が多くの市民の皆様深く理解をされ参画いただけるよう創意工夫を凝らし、後世にわたって私たちの志が受け継がれていく青年会議所らしい記念事業を行います。

また、私たちの打ち出した「明るい豊かな地域づくり」が、70周年そして100周年へと繋がるべくしっかりと組織とするために会員拡大活動が急務であります。まずは事業の全てを拡大活動と捉え、自分から青年会議所へ入会したいと思っただけのような事業を展開して、既存のメンバーはもちろん、新しく入会したメンバーも、共に汗を流した青年会議所メンバーをお互いに一生の財産とすることができるような会員相互のこころの交流が大切であると考えます。

私は一宮青年会議所に入会し、同じ志を持った仲間と苦楽を共に活動を続けていくうちに、いつしか社会のために何ができるのか、子どもたちの未来のために何ができるのかと考えるようになり、これまで漠然としていた夢や目標が鮮やかになり、新たな人生観が描かれました。また、様々な活動の中で感動や達成感を得て、そして多くの仲間と切磋琢磨することで友情や絆を得ることができました。これらは、私にとってかけがえのない財産となり人生の羅針盤になることでしょう。40歳までという限られた時間の中で、このすばらしい JC 活動を、一人でも多くの青年に経験していただきたいと心から願っています。

最後に

この地域の将来を担う子どもたちは、一番身近な大人である親の背中を見て育ち、親の言動か

ら学び、おそらく同じような言動を取るように成長していくでしょう。私たち一宮青年会議所のメンバーは地域の親として、模範となるべく常に自らを律し、襟を正して行動するために、こころやさしくあろうと誓います。

茨木のり子さんの詩に「自分の感受性くらい」という作品があります。

ばさばさに乾いてゆく心を
ひとのせいにはするな
みずから水やりを怠っておいて

気難かしくなってきたのを
友人のせいにはするな
しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを
近親のせいにはするな
なにもかも下手だったのはわたくし

初心消えかかるのを
暮しのせいにはするな
そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を
時代のせいにはするな
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

茨木のり子「自分の感受性くらい」(花神社)

私たちのひとつひとつの青年会議所活動は小さなものかもしれませんが、自分を保ち、物事に背を向けずに謙虚な姿勢で取り組み、不況だから、時代が悪いからと、何でも責任転嫁をせず、情報が溢れ、複雑化している時代の中で、その時代に流されることなく、本当に大切なものが何かを忘れないように自信を持って活動してまいります。

その積み重ねが、きっと一宮市を明るい豊かな^{まち}地域にすることを信じて。